

平成30年度学校評価報告書

学校名（廿日市小学校）

評価計画					自己評価						
中期経営目標 (めざす児童生徒像)	短期経営目標 (めざす児童生徒像)	目標達成のための方策	評価項目・指標	目標	中間 8月	最終 2月	達成	評価	結果と課題の分析	学校関係者評価 コメント	改善方法
「わかる」「楽しい」授業をつくる。	◎主体的な学びを実現する指導方法の工夫 【小中共通】	「学年」を中心とした算数科の研修を充実させる。	全体・学年研修を実施し、授業向上につながったと感じた教職員の割合	100%	89%	100%	100%	A	全体研修や学年研修、公開研究会を行い、学年全体で算数科の課題発見解決学習の単元開発を行ったり、手立てを考えたりしたことで、教材研究の機会や授業を見合う機会が増え、授業力向上につなげることができた。	公開研究会では算数科の授業づくりに学校全体で取り組んでいる様子を見ることができた。	60%未満児に対して、基礎学力を定着させるとともに、来年度はユニバーサルデザインの考え方を生かした授業づくりを研究テーマとし、全員がわかる・できる算数授業を目指していきたい。
			全国学力・学習状況調査のB問題と標準学力調査の活用問題で60%以上正答した児童の割合 【市共通項目】	60%	全国国語B 61% 全国算数B 52%	標準学力 国語活用B 71%  標準学力 算数活用B 57%	118%  95%	B	標準学力調査では、算数が目標値を達成できなかった。全国学力・学習状況調査の算数Bでも、目標値を達成できなかった。しかし、標準学力調査においては、3～5年生は全国平均より、13.6～21.3ポイント上回っており、既習の活用を意識した授業展開を行った結果だと思われる。6年生の結果が全国平均より下回った(-1.4)ので、今後も系統を意識した指導を行い、活用力の向上を図りたい。	文章をしっかりと読んで問題を解くために問題文に線を引かせることや、学習ルールを決めて守らせることなどを取り組みに当たって、「ルールだから」ではなく、子ども達が「何のために線を引くのか」を理解していないと意味がない。手段が目的にならない指導をしてほしい。	
	学習に向かう学級集団づくり	「廿小学校のルール」の価値・意味を児童と共有し、定着を図る。	児童アンケートで「廿小学校のルール」を実践していると答えた割合	80%	授業挨拶95% 返事 91% 下敷き 89% ノート 93% 次の準備86% ベル着 90%	97% 90% 89% 95% 86% 91%	113%	A	肯定的評価が多少の増減はあるものの前回とほぼ同じ結果だったことから、子どもたちはルールを意識していると言える。これは、教師による声かけによるものであると思われるので、自分で考えてこれらの行動ができるように定着を図りたい。	学級開きや年度初めで学習のルールの意味や価値についてしっかり話をし、徹底を図る。	

豊かな「心」を育む。	◎児童の自己有用感の高まり	甘小「誇れる3つの自慢」の実現に向けて活動を仕組む。	児童アンケートによる肯定的な評価の割合	90%	挨拶 91% 聞き上手93% 身だしなみ 90%	93% 92% 94%	103%	A	「3つの自慢」の向上に向けて、委員会を中心に児童の主體的な活動の場面が多く見られた。また、各学年で目標を設定し毎月振り返りを行い、児童の意識も高まった。意識の継続が課題である。	身だしなみで気になるのは、セーターやポロシャツが汚れたり破れたりしたまま登校している児童を何名か見かける。家庭の問題もあると思うが、何とかしてやれないものか。	服装については、保護者にも協力を促し、子ども達が身なりを意識して生活できるようにしていきたい。また、児童に「3つの自慢」が根付いてきたので、来年度も継続して取り組んでいきたい。
		「自分の頭で考える」を指導のキーワードとして、児童に意識させる。	児童・教職員アンケートによる肯定的な評価の割合 教職員：意識して指導した。 児童：自分の頭で考えて行動した。	80%	教職員 86% 児童 90%	92% 94%	116%	A	教職員の指示を減らし、様々な場面で、児童自身が考えることを意識させた。児童が自ら考えて行動したことを認め、さらに活躍の場をつくることにより、自己有用感も高まっている。(91%、昨年度より8%up) 今後も問題行動の未然防止につなげたい。	「自分の頭で考える」ことは教職員が普段から意識して指導することに係ってくると思う。考える癖をつけるためには、メモを取らせる、指示をすぐ与えないなどの工夫が必要だ。	来年度「しっかり考える・やりきる・思いやりをもつ」をキーワードにいろいろな学校生活の場面で児童に主体的に行動できる児童を育成していく。
保護者・地保保護者・地域の信頼を高める。	◎「甘笑応援団」の有効な取組	学校と地域の双方が効果的を感じる支援となるよう、調整会議で状況把握し、改善策を講じる。	教職員・応援団アンケートによる効果的だったと感じた割合	80%	95%	100%	125%	A	全ての学年が「甘笑応援団」の授業支援を依頼し、「大変役立った」「子どもたちは達成感を味わうことができた」と教職員から肯定的な反応を得た。また、ゲストティーチャーとして地域の祭りや昔遊び、伝統料理等を学ぶ機会を得ることができた。	甘笑応援団をさせてもらって、元気をもらった。子ども達の達成感ややる気を引き出せるよう、できる範囲で無理のない活動を継続できたらよいと思う。	今年度最後の甘笑応援団調整会議で出た反省を来年度の活動に生かし、学校と地域が連携・協働していきたい。

◎印 重点項目